人権映画会
「レインツリーの国」を鑑賞して

さて、45歳も過ぎて感動のラブストーリーの感想を書くことになろうとは思っていなかったので、何ともくすぐったい思いがします。

この映画では主人公の向坂伸行が学生時代に読んだ忘れられない本「フェアリーゲーム」という小説の結末をネットで検索したのをきっかけに、「レインツリーの国」というサイトを運営している人見利香と知り合います。

2人は思い出の本をきっかけに交流を重ねていきますが、利香は難聴の障害を持ち、伸行は大好きな父親に忘れられた者として傷ついていました。そんな2人がお互い傷つけ、すれ違いながらも惹かれあってゆく話です。

とにかく、利香役の西内まりやが可愛い。伸行役の玉森君がやや上から目線の男前な感じが少し気になりますが、この映画を見て色んなことを思い出しました。

映画の話から少しそれますが、私は学生時代に2年間寮生活をしました。相部屋の友人は生まれながら難聴で、映画の中でもあったように、対面で話をするときには唇の動きや補聴器を使って会話ができますが、大勢でアホな話をしている時や、マイクを使っての先生の講義などは聞き取れない様子でした。でも友人は持ち前の明るさと前向きさで、2年間一緒にいて僕が困ることはほとんどありませんでした。彼の性格には、彼の母親の明るく豪快で明け透けな性格が大きく影響したと思います。生まれながらの難聴だと言葉を覚えるのが難しいと聞きましたが、特に不自由さを感じさせなかったのはやはり母親の力ではないでしょうか。

当日は大勢の方にご来館いただきました

映画の中で、いくつか印象に残っている場面があります。

利香が会社でひどい目にあい、伸行に会いたくて伸行の会社まで行くと、偶然伸行が同僚の女性と腕を組んで歩いている姿を見てしまう。打ちひしがれた思いで家に帰ると、娘の帰りを心配した母親が玄関先で待っている。母親の顔を見て泣き崩れる利香を母親は、何も言わず抱きしめる…。そんな場面です。

もう1つは美容室を営む伸行の母が、利香の髪を切りながら、伸行や自分に言い聞かせるように「刻んできた時間があったことは事実や」と言う場面。この2つが印象的でした。

映画の中の2人の母親を見て、もう1人思い出したお母さんがいます。競泳の中村智太郎選手のお母さんです。中村選手は生まれつき両腕がありませんでしたが、5歳から始めた水泳で、アテネからリオまでの4大会連続でパラリンピックに出場。ロンドンでは、銀メダルを獲得された選手です。以前、中村選手とお母さんにお会いし、お話する機会がありました。失礼な話ですが「子育ては大変でしたか」と聞いてしまいました。お母さんの答えは「普通です」でした。「大変でした」という答えを想像していた私は、すごく衝撃を受けたのを覚えています。

「普通です」。その言葉は、「両腕のないこの子が水に落ちたらこの子は溺れて死んでしまう。だから水泳を習わせました。子供にとって必要なことをしてあげるのは親として普通のことでしょう?」という意味を含むのだと理解した覚えがあります。この4人のお母さんはみんな強い人のように感じますが、それぞれに葛藤があって、そこにたどり着いたのだと思います。

今は健康な体でも、病気やけがでいつ自分自身や身近な人が障害を持つか分かりません。その時、普通に接することができるのか、足りない部分をお互いに分かり合い助け合えるのか。「レインツリーの国」はそんなことを考えるきっかけになりました。

あともう1つ気になる場面が、ラストのキスシーンで目を閉じる利香に、伸行が『しゃーない奴っちゃな～』といった顔で微笑むところが、ちょっと納得できません（笑）。しかし、綺麗なラブストーリーです。見ていない方にはぜひ見ていただいて、若い人たちには、映画のように素敵な恋愛をいっぱいして欲しいです。

人権機関有田川委員　三木 宏之

お知らせ

人権特設相談所

8月17日(木)、人権特設相談所を開設いたします。相談は無料で、秘密は厳守されます。

●場所／清水会館
●時間／13時～16時

■人権に関する問い合わせ
有田川町教育委員会　社会教育課
TEL　52-2111
FAX　32-4827